

葬儀の拡大化と縮小化

—長野県松本市郊外の農家の『音信帳』から—

倉石あつ子

はじめに

『人文学フォーラム』第九号で、長野県内の事例を用い、家族が縮小化される過程の実態と葬儀をはじめとするさまざまな儀礼や年中行事の縮小化との関わりを報告したが、本稿ではそれらの調査過程で提供された『音信帳』（香典帳）から、葬儀の規模を分析してみたい。『音信帳』は松本市郊外の農村地帯に暮らすある家（M家とする）の明治十六年十月二十四日出棺のM家の当主（A—1）の『音信帳』から存在するが、その妻（A—2）の物は欠損している。『音信帳』を整理するにあたって、それぞれの世代が分かるようにAの次の世代をB、

孫世代をC、曾孫世代をDとした。各世代はA—1 A—2のように記号化し、1は当主、2は当主の妻を示すことにした。明治期の関係は聞き取りで分かる範囲を記したが、名字やその後の付き合いの関係から推測したものもあり、それは備考欄にその旨を記した。本論に入る前に、調査対象集落を概観しておきたい。

調査対象集落は長野県松本市郊外（現在は車で松本駅からおよそ三〇分ほど）の山裾標高六四〇メートルほどに位置する集落で、戸数はおよそ五〇戸。稲作を中心に畑作・養蚕・林業などが営まれていた。それらの第一種産業は当時とそれほど変化はないが、養蚕は昭和四〇年頃までで終わり、その後は栗やジュース原料のトマト栽培な

どが行われている。ムラの中は、南・中・北・西・下の組に分かれ、土地の人たちは、「北村の誰々が…」のような呼び方をしている（ただし、西村は昭和三〇年代に事情があつて南村から分かれた組である）。各組は一〇戸から一五戸前後で成り立っており、それぞれの組で「庚申講」と呼ぶ信仰集団が形成されており、「オコシンナカマ」などと呼んでいる。日常的な付き合い、冠婚葬祭はこの講集団が中心となつて行い、講と組の構成員は全く同じである。そのほか、比較的多いM姓とS姓では、「イワイデンサマ」などとよぶ祠を所有し、同姓が集まつて「先祖さまの祭り」が行われている。ムラの家々は真言宗（日蓮寺）と曹洞宗（T T寺）の家がほぼ拮抗しており、告

別式における寺が関わる儀礼には多少の手順や経に違いはみられるものの、習俗として行われる慣習に宗派の違いは見られない。人が亡くなるとまず、組の長に知らせが行くが、同時に本分家関係にある家にも知らせが行く。知らせを受けた組の家々は夫婦で手伝いに参加するし、本分家も手伝いに参加する。また、隣の組は一人が手伝いに参加するが、家によって付き合いの濃い家は夫婦二人が参加する。寺はどちらの宗派もムラ内にあり、葬儀以外の儀礼や年中行事には、他の家々と同じように参加する。寺だからといって免除されることはない。

組内の人々の役割（寺との交渉・役所への届け出・客の接待役・葬儀委員長・親戚などへの知らせをするヒキヤク・墓穴掘り・葬具作りなどなど）を決め、女衆はお勝手の手伝いを行うよう、経験豊富な年長の者を長としてすぐに枕飯を炊いたり枕団子をつくったりする準備に入る。この地域では一般的に葬家の者はお勝手や葬儀のやり方などに口をはさんだり手出しをしたり

しないことになっており、相談を受けた時だけ「こうして欲しい」というが、そうでない場合はなるべく死者のそばについている。お勝手にしばしば顔を出したりすると嫌がられ、子供でもあまり顔を出さないのが手伝いの人に対する礼儀でもあった。手伝う方はそれぞれの家の親戚や経済力などを勘案し、通知するべきところを落とさないように考え、葬儀の規模を考え、献立を考えしたので、ムラ内の各家の事情を熟知していないと難しい仕事であった。一九六〇年代ごろまでは、そうしたことがあまり問題なく進められ、葬家・手伝い共にそれほど問題が生じることはなかった。

より埋葬されている。記録の名前をたどり家特定することができていない部分もあるので、正確は稿を改めたいが、香典を出した参列者は六三人（内一名の氏名記入なし）が記録されている（表1）。夫婦で参加している場合も考えると実際の参列者ももっと多いだろう。現金で二十銭から五十銭の香典と現金に米や粉を添えて贈っている。米は二〜三升であり、米の代わりに粉を一升から三升贈っているものもみられる。葬家との関係は聞き取り中で、いまだにはつきりしない部分が多いが、組内や同姓の家と思われる中には現金と強飯を贈ったり、御備（御供のこと）が記録されているものもみられる。御備は小さく丸めた白い餅で、祭壇に供える餅であり、強飯は仏に供えるのは勿論、参列者にふるまわれる黒豆が入った白い強飯である。また、「行器」とだけ書かれているものもあるが、このへんの習俗としてホカイには粉を入れていくのが一般的なので、行器一杯の粉を持参したものと思われる。

1、明治期の葬儀

明治十六年、M姓の本家から分家した初代 定之丞が十月二十四日出棺し、土葬に

葬儀の拡大化と縮小化

表1 明治16年10月24日出棺の『音信請納簿』資料 A-1

	香典 品物	名前	Aとの関係	他村住所	備考
1	金二銭 米二升	□□市右エ門	ムラ内		同姓
2	米三升	川野徳太郎			
3	金五銭	百瀬猪蔵	ムラ内か？		
4	米三升	百瀬泰蔵	ムラ内か？		
5	米二升	▲▲政治	ムラ内		
6	米二升	△△彦治郎	ムラ内		S姓
7	金七銭 米七升	□□幸吉	ムラ内		同姓
8	行器	○○仙治郎	ムラ内		
9	粉七升	百瀬政市	ムラ内		
10	金拾銭 行器	◇◇順左エ門	ムラ内		
11	米三升	中村庄作			
12	金五拾銭 行器	□□新五左エ門	ムラ内		同姓
13	金参銭六分 粉七升	□□源吉	ムラ内		同姓
14	金参銭六分 行器	◎◎幾三郎	ムラ内		62と本分家
15	金式銭 米参升	□□八三郎	ムラ内		同姓
16	金参銭六分 粉七升	□□舞吉	ムラ内		同姓
17	金三拾銭 強飯七升	△△善吉	ムラ内		S姓
18	金七銭 御備	□□喜次郎	ムラ内		同姓
19	金式拾銭 行器	□□七兵衛	ムラ内		同姓
20	金式銭 粉七升	□□九郎右エ門	ムラ内		同姓
21	米式升	□□米吉	ムラ内		同姓
22	米式升	百瀬七之丞	ムラ内か？		
23	米七升	△△徳左エ門	ムラ内		S姓
24	行器	川野権蔵			
25	粉七升	○○磯右エ門	ムラ内		
26	金拾銭	古町泰次郎	長男嫁の生家の関係	小屋村	
27	金式拾銭	古町文三郎	長男嫁の生家の関係	小屋村	
28	金三拾銭	古町澤次郎	長男嫁の生家の関係	小屋村	
29	金式拾銭	宮嶋幾弥		小屋村	
30	金式拾銭	宮嶋次郎		小屋村	
31	金拾銭 行器	中野善六		洗馬村	
32	金拾銭	百瀬牧蔵		本洗馬	
33	金三拾銭	百瀬福次郎		下平村	
34	金式銭四分	百瀬善太郎		下平村	
35	金式拾銭	米久保源左エ門		南内田	
36	金参拾銭 行器	大野音弥	妻の生家？	大月耕地	
37	金式拾銭	宮林民弥		出川町	
38	金式銭 粉七升	△△関弥	ムラ内		S姓
39	金参拾銭	土田亀		南内田	
40	金式銭	百瀬五郎兵衛	ムラ内か？		
41	金三銭式分	百瀬兵左エ門	ムラ内か？		
42	金式銭	○○橘吉	ムラ内		
43	金四銭	伊藤横造		新田	
44	金四銭	伊藤嘉三エ門			43の関係か
45	金式拾銭	池田若十		南内田	
46	金一銭六分	△△権之丞	ムラ内		S姓
47	同	△△菊右エ門	ムラ内		S姓
48	同	△△良右エ門	ムラ内		S姓
49	同	△△辰次郎	ムラ内		S姓
50	同	△△清吉	ムラ内		S姓
51	同	△△民之助	ムラ内		S姓
52	金七銭六分	△△安次郎	ムラ内		
53	同	△△沖左エ門	ムラ内		S姓
54	金五拾銭 行器	高山富三郎		高松村	
55	菓子一	横林山TT寺	ムラ内 且那寺		
56	金拾銭 素麺三把	塩沢山HH寺	ムラ内 真言宗		
57	金七門 御備餅	□□兵右エ門	ムラ内 本家か？		同姓
58	金五拾銭 行器	山本伊扇治		埴原	
59	金式銭	△△歌蔵	ムラ内		S姓
60	式拾銭				名前の記述なし 大寶現がそうめんとともに持参したのか？
61	そうめん三把	大寶現	ムラ内		御講の肩書あり
62	天保式杖	◎◎由兵衛		北内田	14と本分家
63	そうめん三把	中山固金治			

葬儀の香典は「音信帳」には「見舞」とのタイトルがつけられて書き始められており、香典という語は使用されていない。また、葬儀の記録に続き、頁を改めて「七日受納」の記録があり、その後惣計七円七拾六銭九分の収入があったことが記されている。なお、初七日の参列範囲は二五軒で、金を五銭持参したのは一軒のみであり、他は粉を一升から三升持参している。

葬儀の参列者は同姓M姓やもう一つの大きな同姓集団S姓などいわゆる地縁のムラ内の者たちと妻の生家（妻は天保六年生現松本市から嫁ぐ。大正九年没）及び長男の妻の生家など親族が中心であり、村内の他集落のもの五人、現松本市や塩尻市の者五人で、いずれも徒歩三時間以内の距離に存在する集落である。この時点での参列者の特色を上げるならば、婚姻・同族・講を中心とした地縁集団の構成員がほとんどであるといえることができる。

葬式後のさまざまな経費支払は、記録の綴じられ方や惣計の書かれた場所からみる

と、どうやら初七日が終わってから行われたものと思われる。その支払い内容をみると、僧はムラ内のT T寺・H H寺と伴僧二人及びR寺（場所不明）の五仏を頼んでいることが分かるが、定之丞は分家した初代の家であり、なぜ五仏も依頼した葬式になっているのかは不明である。また、T T・H H寺ともに宗派が異なるため、この問題も簡単には解けない。M姓はほとんどが曹洞宗であるT T寺の檀家である。S姓はH H寺の檀家である。事例で取り上げる家は後に神道に改宗するが、この時点ではT T寺の檀家である。本家がT T寺であったため、当然分家も本家と同じ檀家になっているということであろう。したがって、墓もT T寺の裏にある本家の墓の近くに存在する。神道になってからの墓は、別の場所に移され、寺の裏にあった墓から遺骨も移されている。

そのほか支払い内容から判明することは、以下の通りである。同じ大字内の仲三郎（この集落からは分かるが名字の記述がな

く、家はいまだ特定できていない）を包丁方として依頼し、五拾銭が支払われている。庚申組の手伝いは当然あったものと思われるので、その外にセミプロのような料理人が村内に存在し、冠婚葬祭の折には依頼されて手伝いに訪れていることが分かる。棺桶を作った桶屋に一円六十五銭、酒屋（村内と松本市の酒屋）に十一斗分の支払い五円八十六銭余が支払われている（村内の酒屋の分は一部は未払いである）。あげ、乾物、キノコ、饅頭などが購入されているが、この葬儀の献立は記述されていないので、残念ながら全く不明である。

なお、妻（天保六年生）は大正九年に亡くなっているが、その記録は欠損している。

2、昭和初期の葬儀

前節でみた死者の長男諫蔵（安政三年生、明治十四年結婚）が昭和十三年一月二十二日に死亡し、神葬祭にて葬儀が行われている。前記の定之丞の折には曹洞宗の僧を依

頼した仏式で行われているので、この間に
 仏教から神道に改宗したものと思われる。
 その葬儀の折の香典を持参した参列者は、
 表2の通りである。定之丞が亡くなった時
 点では、M家は定之丞の妻と長男諫蔵・そ
 の妻（文久三年）・長女（明治十四年生）
 の家族で構成されており、稲作・畑作・養
 蚕と多少の山仕事を基本とする生活が展開
 されていた。ムラや村のどのような役職に
 ついて居たかは定かでないが、基本的には
 ムラ内をベースにした生活が営まれていた
 と見られ、葬儀に五仏を頼んでいる以外は、
 ごく普通の農家の葬儀規模であったと思わ
 れる。諫蔵は徒歩四〇分ほどの隣村の集落
 から妻を迎え、夫婦には長女と長男（明治
 十七年）が生まれ、長女は隣村（母親と同
 村。徒歩で三〇分ほどの距離にある）へ明
 治三十三年に嫁入りし、長女・長男・次
 男・次女をなしている。長男は明治四十
 一年五月隣村のN家の長女（明治二十五年生
 まれ）と結婚し、長男（一歳を迎える前に
 死亡）、長女（大正元年）、長男（大正五年

実際には二男だが戸籍上は長男として届け
 出）、次女（大正十年）、二男（大正十三年）
 をなし、諫蔵死亡時点では、諫蔵の妻・長
 男夫婦、長男の子ども、諫蔵にとっては孫
 三人が同居していた。孫長女は昭和九年に、
 現松本市の農家の三男（東京在住）との婚
 姻が整い婚出している。

M家の生業は定之丞の時代と変わらない
 が、諫蔵夫婦が分家してもらった家を少し
 でも大きくしようと働き、田と山林が定之
 丞の時代より多少増えていたという。長男
 はムラ内の役割を果たしつつ、趣味の俳句
 の仲間に入りその方面での活動も広がって
 行く時代である。諫蔵死亡の数年前より孫
 長男（実際には二男）が公務員として勤め
 始めている。こうした長男と孫長男の付き
 合ひの関係は、葬儀の参列者にも影響を与
 えているほか、諫蔵の長女の子どもたち
 諫蔵にとつては外孫三人（長女・長男・二
 男）が結婚し、長女は東京に居住し、長男
 は勤務先の諏訪に、二男は婿養子として岡
 谷市に居住しているため、その関係の参列

者もみられる。また、定之丞の葬儀の折に
 は諫蔵の婚姻による姻戚及び同姓やムラ内
 の家々が基本となっていたが、およそ五十
 年を経た後の諫蔵の葬儀は定之丞の葬儀の
 折のほぼ倍の参列者一三三人が記録されて
 いる（表2）。家族が増えたことによる姻
 戚関係・それをめぐる親族関係も増加し、
 更に長男や孫の社会的関係の広がりがこの
 数に大きく影響していることがわかる。定
 之丞の葬儀は姻戚と地域内の同姓や講を中
 心とした地縁が中心であったが、諫蔵の場
 合、孫の社縁ともいえるべきものが発生しつ
 つあることが分かる。

なお、記録によれば、葬儀には三人の神
 官を頼み御相伴兼御取持として組内から三
 人、組外の親しくしている家の当主一人を
 依頼している。神官と一般の参列者の献立
 は分けられ、神官には

面引 羊羹 林檎 中板 天麩羅 頭付
 三盛 よせ 蜜柑 竹〇（チクワ）
 刺身 蒟蒻
 井 豆腐 漉花茶 里芋

表2 昭和13年 B-1

■=親族 同族□=M姓・△=S姓 そのほかの記号はムラ内の家及び関係からたどって個人の特定が出来ぬよう配慮した。

	香典	品物	名前	Bとの関係	他村住所	備考
1	金三十銭	米2升	○周太郎	ムラ内		
2	金三十銭	米2升	◇禎文	ムラ内		
3	金十銭	米2升	△△東雄	ムラ内		
4	金三十銭	米1升	□□菊五郎	ムラ内		同姓
5	金五十銭	米2升	□□浅市	ムラ内		同姓
6	金十銭	米1升	□□小三郎	ムラ内		同姓
7	金三十銭	米1升	□□指一	ムラ内		同姓
8	金五十銭	米2升	△△悦蔵	ムラ内		S姓
9	金壹円	米2升	●●万一	ムラ内		
10	金五十銭	米2升	◇◆清	ムラ内		
11	金三十銭		◆◆秀義	ムラ内		
12	金十銭	米1升	■◇宇八(はる)	ムラ内		同姓内の家から嫁に行き同姓に加わった
13	金三十銭		○右門	ムラ内		
14	金二十銭	米1升	□□義文	ムラ内		同姓
15	金十銭	米1升	○幸穂	ムラ内		
16	金壹円		■千廣	村外 娘の嫁ぎ先の分家	隣村 徒歩で30分ほど	親族
17	金二十円	お供え	■積次	村外 娘の嫁ぎ先	隣村 徒歩で30分ほど	親族
18	金五十銭		◇◇源年	出入りしていた神官 寺から神道に変更し、神葬祭となった。神官が香典を出している。	村内・となり集落	
19	金三円		■俊一郎	積次の息子	岡谷市	親族
20	金一円		○由平	ムラ内		
21	金一円	米2升	○喜悦	ムラ内 息子の俳句仲間		
22	金一円	米2升	■繁清	隣村		息子の嫁の関係か?
23	金一円	米2升	○茂彦	ムラ内		
24	金五円	お供え	■兵司	隣村 息子の嫁の生家		親族
25	金三十銭		△△繁左衛門	ムラ内		
26	金一円		△△義近	ムラ内		後に分かれるがこの時点では同じ組
27	金三円	お供え	■頼蔵	村外 妻の従弟	松本市	親族
28	金貳円	お供え	△△督男	ムラ内 妻の生家		妻の生家は村外だがこの家を生家として嫁いだ
29	金五十銭		横山郡吾	村内 隣集落 孫の勤務先		
30	金十円	お供え	■庄司	孫の嫁ぎ先の夫		
31	金一円		田中政雄	隣村か?	東京	24の本分家関係か?
32	金三円		■作之助	母親の生家	松本市	
33	金一円	行器	△△栄	同組		親族
40	金一円	米2升	○孝逸	ムラ内 息子・孫が親しくしている		
41	金二円		■忠太郎	母親の生家の本分家関係?	松本市	親族
42	金一円	米2升	大澤千馬	息子の俳句関係か?	松本市	
43	金一円		大和亘	村内 孫の関係か?		
44	金一円		■巳年男	隣村 息子の嫁の生家の分家		親族関係
45	金二円		■正一	息子の嫁の姉妹の嫁ぎ先	諏訪市	
46	金一円	お供え	□□満喜司	村外 本家の分家	松本市	
47	金五円	お供え	■恒弥	村外 隣村 妻の兄弟 妻の実際の生家		親族
48	金一円		丸山実康	村内 息子の俳句仲間か?		
49	金一円		倉橋藤吉	村外 息子の俳句仲間か?	現松本市	
50	金三円	お供え水菓子一籠	■秀夫	村外 嫁の親戚	松本市	後に孫がこの弟に嫁ぐ
51	金二円	行器	□□文雄	ムラ内		同姓 この時点では同組
52	金一円五十銭		百瀬威勇	隣村 関係不明		
53	金五十銭		丸山英勇	村内 隣集落 関係不明		

葬儀の拡大化と縮小化

	香典 品物	名前	Bとの関係	他村住所	備考
54	金五十銭	丸山多市	村内 隣集落 関係不明		
55	金二円	■■■忠勇	村外 息子の嫁の妹の嫁ぎ先	現松本市	親族
56	金二円	清澤宇喜一	村外 関係不明	松本市	
57	金一円	■■■重三	村外 隣村 妻の生家の関係か？		親族関係
58	金一円	■■■寿一郎	村外 隣村 妻の生家の関係か？		親族関係
59	金一円	百瀬三蔵	村外 隣村 関係不明		
60	金一円	樋口賢雄	村外 隣村 関係不明		
61	金一円	小松喜一	村内 息子の俳句関係か		
62	金一円 弔電	■■■秀雄	娘の長女の夫	東京	親族
63	金五十銭	横山富一	村内 隣集落 関係不明		
64	金五円 お供え	□□賢治	同組 本家		同姓
65	金二円	□□亮輔	村内 本家の分家		同姓
66	金二円 お供え	□□敏寿	ムラ内		同姓
67	金一円	牛丸志げる	？		
68	金五十銭	丸山登喜雄	村内 隣集落 息子の俳句仲間か		
69	金一円	上條辻造	村外 隣村 関係不明		
70	金一円	樋口幸章	村外 関係不明		
71	金一円五十銭	■■■三代繁	村外 孫の嫁ぎ先 夫の生家	松本市	親族
72	金一円	●●寺	組内にある寺 檀家は主としてS姓が多い		
73	金一円	丸山善逸	隣集落 息子・孫の親しくしている家		
74	金五十銭	△△昌俊	ムラ内		
75	金五十銭	△△勝男	ムラ内		
76	金五十銭	△△理文	ムラ内		
77	金一円五十銭	■■■秀雄	村外隣村 娘の長女の嫁ぎ先 婚家		親族
78	金七十銭	百瀬勝康	村内 隣集落		
79	金二円	青柳今朝市	村内 長男嫁の従妹の嫁ぎ先		
80	金七十銭	百瀬治作	ムラ内		
81	金五十銭	手塚清司	村内 隣集落		
82	金五十銭	丸山紋治	村内 隣集落		雑貨屋
83	金五十銭	喜山清十	村内 隣集落		
84	金一円	塩原藤平	村外 隣村 息子の俳句仲間？		
85	金一円	丸山武郎	村外 隣村 息子の俳句仲間・		
86	金一円	北原浜雄	村外 隣村 息子の俳句仲間か？		
87	金一円	乾進	村外 息子の俳句仲間か？		
88	金一円	荷村富一郎	村外 息子の俳句仲間か？		
89	金一円	塩原俊作	村外 息子の俳句仲間か？		
90	金五十銭	丸山喜市	村内 息子の俳句仲間か？		
91	金五十銭	△△巴	ムラ内		
92	金一円	■■■東人	村外 隣村 娘の嫁ぎ先の親戚		親族関係
93	金一円	■■■小一郎	村外 隣村 娘の嫁ぎ先の親戚		親族関係
94	金五十銭	百瀬正夫	村内 孫の友人か？		
95	金一円	宮澤留治	村外 息子の俳句仲間か？	松本市	
96	金二十銭	百瀬広吉	ムラ内		
97	金三十銭 素麺 菓子一袋	上條興策	ムラ内		
98	金一円	百瀬国男	村内 隣集落 息子の俳句仲間か？		
99	金三十銭	△△長	ムラ内		
100	金五十銭	△△清吉	ムラ内		
101	金五十銭	■■■？	ムラ内		
102	金三十銭	△△仲次	ムラ内		
103	金五十銭	〇〇松之助	ムラ内		
104	金一円	花村茂行	村内 隣集落 孫の友人か？		
105	金一円五十銭	塩原由茂	村外 隣村 息子の俳句仲間か？	現松本市	
106	金一円	中村清重	村外 隣村 息子の俳句仲間か？		

	香典 品物	名前	Bとの関係	他村住所	備考
107	金二円	■■辛一	村外 隣村 息子の嫁の実家の弟	現松本市	
108	金二円 御供	□□茶治郎	ムラ内		同姓
109	金五十銭 米2升	〇〇真寿夫	ムラ内		後に分かれるがこの時点では同じ組
110	金五十銭 米2升	〇〇重作	ムラ内		後に分かれるがこの時点では同じ組
111	金二円	■■博見	村外 息子の嫁の妹の嫁ぎ先	上山田	親族関係
112	御供造花一对	■■督衛	村外 外孫	諏訪市	親族
113	金二円	田中祐蔵	村外 息子の俳句仲間か?	現塩尻市	
114	金一円	丸山芳人	村外 息子の俳句仲間か?	現松本市	
115	金一円	〇〇弥七治	ムラ内		
116	金二円	吉田酉三	村外 住所からして19の親戚か?	岡谷市	
117	金一円	大月芳男	村外 不明	現安曇野市	
118	金二円	汲田喜和恵	村外 不明		
119	金二円	■■文雄	村外 隣村 妻の生家の親戚	現松本市	
120	金二円	中澤美喜雄	不明		
121	金五十銭	△△兼市	ムラ内		
122	金一円	鎌倉安蔵	村外 不明	現松本市	
123	金五十銭	△△	ムラ内		
124	金二円	■■本廣	村外 孫の嫁ぎ先の夫の兄	現松本市	親族関係
125	金一円	■■喜市	村外 長女の嫁ぎ先	現松本市	親族関係
126	金一円	■■幸市	妻の義理の従妹か	現安曇野市	親族関係
127	素麺三 菓子一袋	〇〇興策家内	ムラ内		

皿 あげ
 大平 麩 椎茸 人参
 吸物 海苔 白瀧 花巻
 平 油あげ
 皿 切身 ます
 台引 大阿げ
 飯
 引物
 汁
 が出されている。一般の払席には
 三盛 阿げ 蜜柑 田作 よせ
 井 豆腐 里芋 瀧尾花
 刺身 蒟蒻
 皿 あげ
 が出されている。これらの献立に要した、「角天、生阿ん、中板、花巻、頭付、竹〇、ひじき、乃り、ふ、志いたけ、志らたき、さけ、田作、切いか、菊ゆば、可らし粉、はし(箸)、うす板、味出し(削節) 青コ」などは

松本市錦町の古田魚店で購入している。「さつま芋、さと芋、みかん、りんご」などは天神町の橋本屋、「赤ザラ砂糖、三盆、中白」などの砂糖類は錦町の中澤砂糖店、「醤油」はヤマ長醤油店、「油」は大名町瀧文油店、「菓子」は南部市場、「白半モス・さらし・中折」は博労町小松文、「そうめん」は博労町大津屋、「麻・水引・洋紙・金さじ・せんこ(線香)」は博労町大兵吉店、「パケツ・金ひしゃく」は博労町岡野金物店などでまかなっている。上記の町々は二里程度の距離にあるが、これだけの物を揃える為には松本まで出かけないと揃わなかったことが推測できる。代金は定之丞の時と同様、ついで買ってきて香典で清算したものと思われるが、その記録は見られない。

諫蔵の時代はいうまでもなく土葬で、葬列を組んで墓まで行っているはずであるが、それらに関する役割などの記述はない。葬儀後、十日祭、二十日祭、百日祭、一年祭、五年祭などの年忌供養が行われ、昭和二十

二年十年祭が行われた記録で終わっている。諫蔵の妻B—2は昭和三十年九月に死亡し、長男C—1を喪主として葬儀が行われている。記載されている名前だけで二七名の参列者がみられる。

香典は、諫蔵の時には金に米や粉が添えられていたが、妻の時代になるとほとんどが金で、妻の従弟や孫嫁の生家などが御供え（記録には御備と記述されている）として行器や餅をつけて持参している。

その時の家族状況はこの時までには孫長男が結婚し、孫次女が婚出し、孫二男が就職・結婚して他出し、それぞれの家庭には次の世代の子供たちも生まれ、B—2にとっては曾孫が六人いることになる。さらに、喪主夫婦の擬制子などの出席に加え、孫長男夫婦の擬制子も加わり、更に孫長男の勤務先の関係者や二男の勤務先関係者などが一五名ほど増加している。加えて姑の生家との付き合いもまだ引きずっている。夫の母親はすでに三〇年余以前の大正九年に亡くなっており、生家は代替わりをしている

にもかかわらず付き合いは子供世代が片付くまで続いたものと思われる。変化といえ、諫蔵の時には弔電は一通だったのに対し、四通に増えている。

このように参列者数が増えたため、葬儀後の忌中払い（精進落とし）は三人の神官（取持には同組の年長者二人を依頼）、遠来客、村方客の三回に分けて行われている。

忌中払の献立は

吸物 竹輪 白瀧 青菜
 三盛 羊羹 天麩羅 切鯛
 面引 蒟蒻 鯖 林檎 油揚 小鯔
 井 豆腐 油揚 其他

右 羊紙包 ニシテ渡ス
 引物 大白砂糖 三白メ

とあり、鯖や小鯔などの青魚が使用されるようになっていた。また、引き出物に砂糖が使われるようになっていたことも分かる。献立に必要な買い物は、ムラ内にできた雑貨店や酒屋で賄われており、ムラの中の変化も読みとることができている。

3、昭和四十年代の葬儀

諫蔵の長男C—1の『音信帳』は紛失しているため、C—1の妻C—2についてみていきたい。C—1は昭和三十九年八月老衰のため死亡しているが、その二年ほど前、M家はC—2やD—2の病氣などにより、農業をやめD—1の勤務地の近くに引越した。したがって、C—1の葬儀は、その引越し先の市内の自宅で神葬祭で行われた。B世代の葬儀で参列者はかなり増加しているが、C世代の場合、B世代に加えて新旧居住地の隣組の付き合い、近所づきあいなどが重なり、更に数は増えている。なお、M家にとってはC—1が初めての火葬であり、それがB世代と大きく異なる点である。C—1の葬儀は自宅で行われたため、新居住地の隣組の人々の手を借りることになった。M家が所属する隣組での初めての葬式であったが、それぞれの家が近在の出身者であるため、大きな習俗の違いはなく、

葬家の人々は手を出さず隣組に任せるとい
う仕来たりもそのまま行われた。忌中払い
の献立なども隣組の人々が心得ていて、ど
のくらの参列者が予測されるかだけを確
認したのみで、特に問題もなく進められた。
ただ、現在は四十九日が骨納めになるが、
M家では告別式が終わった時点で、墓に骨
を納めに行ったという。Bなどの世代が土
葬であり、告別式が終わると棺を墓に埋め
る、という習慣がまだ意識の中に残ってお
り、骨は早く墓に納めないといけない、と
いった観念があつたようである。

C—2はC—1を看取つたおよそ十年後
の昭和四十八年二月十日に急逝している。
この間にM家が所属する隣組では、ある家
の大学生が日本脳炎に罹り死亡したため、
葬式を出しているが、他の家ではやはりま
だ葬式がない。したがって、M家では度々
隣組の手を煩わせるのは心苦しいというこ
とになり、通夜は自宅で行うが告別式は駅
近くの旅館の広間を借りて行うことにした。
C—1の時も一五〇人ぐらいの参列者があ

り、家の中は人であふれかえっていたので、
それよりさらに多い参列者を自宅ではとて
もさばききれない、という予測も立てての
ことであつた。C—2が亡くなる二・三年
前にD—1が木曾郡のある町にある職場に
転動したため、元職場と新職場の付き合い
が上乘せされ、確実にC—1の時よりは多
い参列者になることは予測されていたから
である。更に、職場の長となつていたので、
自分が管理する職場だけでなく、付き合い
はかなり広い範囲にわたつていたからであ
る。実際に参列者は表3のように二〇〇人
近い記述をみるに至っている。新職場の構
成員のほとんどはC—2に会つたこともな
い人ばかりであろうが、にもかかわらず香
典を持参し、参列している。勿論、記述さ
れている全部が参列したわけではなく、一
人が何人か分を預かつて参列することもあ
ろうが、それにしてもその数はB世代をは
るかに超え、またC—1をも超えて広がっ
ていることが分かる。参列者の半数は、死
者と直接関係する親族などではなく、長男

の勤務先などの関係が圧倒的であることが
確認できる。そのほか、B世代に比較して
弔電が四六通あり、音信帳に名前のあるも
のも七・八名含まれており、そのほとんど
は遠くに住む親族や長男の友人で、香典は
誰かに依頼し告別式に出席できなかったた
めに弔電を出したのもと思われる。弔電の
内訳は、長男の勤務先の町長・代議士二
名・県議一名・市議二名などのほか、長男
の勤務先の関係者が三〇通ほどとなつてい
る。関係が不明な者も三通ある。また、葬
儀後香典を送つてきたとみられる記述が七
名あり、親族二名(C—2姑の甥)、旧居
住地で親しくしていた家の婚出した娘二名、
長男の交友関係三名である。

全体を通してみると親族が四二名、擬制
親子関係とその親族一名、同姓六名、旧
居住地の関係二二名、現居住地の隣組や近
所の親しくしている家など一八名となつて
おり、記名の半数が親族・同姓・地縁関係
の付き合いのいずれかであることが分かる。
しかし、B世代との絶対的な違いは、親族

葬儀の拡大化と縮小化

表3 御香奠帳 C-2

■ = 親族 □ = 同姓中 M 姓△S 姓 ○ = 旧居住地隣組 ◎ = 限隣組
▼ = 個別識別ができないための伏せ字

	香典 品物	名前	C-2との関係	他村住所	備考
1	二万円 盛花 御供	■庄司	長女夫	東京	紳士服仕立屋
2	二万円 盛花 御供	■芳人	次女夫	松本市	会社員
3	二万円 盛花 御供	■喜満夫	二男	東京	公務員
4	二万円 御供	■明	長男妻生家	松本市	農業
5	一万円 御供	□勝一	本家	旧居住地	同姓
6	一万円 盛花	■忠彦	孫夫	長野市	公務員
7	五千元 御見舞千円	□歎寿	本家からの分家	松本市	同姓
8	一万円	■広司	二男妻生家	東京	
9	五千元 御供 御見舞二千元	○○○武次	本家の長女	旧居住地	旧居住地の家に入った。武次の母は長男の同級生
10	一万円 御見舞三千円	■直太	孫の婚家	長野市	公務員
11	三千円	▼会木曾部会	長男の仕事関係	木曾郡	
12	三千円 盛花	■清志	次女の二男	埼玉県	会社員
13	三千円 盛花	■和水	次女の長男	東京	会社員
14	三千円	■保太郎	二男長女の婚家主	東京	
15	千円	高木賢一郎	長男の職場関係か	不明	
16	三千円	福山茂喜	長男元同僚	市内	公務員
17	三千円 花輪	下▼正一	同姓の娘の嫁ぎ先夫	市内	代議士
18	三千円	二村武	美容院主人	市内	美容師
19	三千円	家高貞?	長男同僚	?	公務員
20	三千円	▼速郎	長女の家の職人	東京	
21	千円	□三也司		旧居住地	同姓
22	五千元 御見舞二千元	GG 郡吾	長男の元上司 長男夫婦の仲人	旧居住地	長男擬制親
23	五百円	△△真一		旧居住地同組	
24	五千元 御見舞二千元	■功	孫の婚家 分家	長野市	
25	五千元	横山栄四郎	不明		
26	三千円 御見舞五百円	□保亀	本家からの分家	旧居住地	同姓
27	二千元	■彦十	28の関係か?	岡谷市	
28	五千元 花輪 御見舞三千円	■俊一郎	夫の姉の二男	岡谷市	
29	千円	笠原壮平	長男同僚か?		
30	千円	荻上あき	長男同僚の妻	市内	
31	三千円 御見舞千円	■繁勝	従兄弟の長男か	松本市	
32	三千円 御見舞二千元	■正一	孫婚家の姉妹婚家	長野市	
33	三千円 御見舞二千元	■典子	孫夫の妹	長野市	
34	三千円 御見舞二千元	■あい子	孫婚家の姉妹婚家	長野市	
35	三千円	高山範弥	長男同僚か?		
36	五千元	■恒弥	姑生家	松本市	
37	三千円 御見舞千円	■政雄	31の本分家関係か		
38	三千円 御見舞千円	■英一	従妹の嫁ぎ先	旧居住地	
39	三千円 御見舞千円	■新治	4の分家	松本市	
40	三千円	山口時男	長男の同僚		
41	九千元	隣組一同		市内	
42	千円	◎◎虎之助	隣組	市内	
43	千円	◎◎睦会	町内の組織?	市内	
44	二千元	手▼実老	親しくしていた仲間	市内	
45	二千元	北▼益三	親しくしていた仲間	市内	
46	千円	米▼寿雄	隣組外の近所	市内	饗節屋
47	五千元 御供	■秀夫	次女の嫁ぎ先本家	松本市	
48	三千円	古輪光義	元同僚	市内	
49	三千円	山内良三	元同僚	市内	
50	二千元	川島邦夫	元同僚	市内	
51	二千元	■茂雄	嫁の従兄弟	松本市	
52	三千円	■豊美	嫁の従兄弟	松本市	
53	五千元	■本広	長女夫の兄	松本市	
54	二千元	千村甫	長男の元同僚か		
55	二千元	児野鉄蔵	長男同僚	木曾郡	
56	千円	棚橋喜一	不明		
57	千円	富永道男	不明		
58	三千円	田村養衛	元同僚 上司	松本市	
59	三千五百円	■元一	長女夫の兄	松本市	
60	三千円	小沢達雄	長男の元同僚か		
61	千円	大島義弘	不明		
62	五百円	○○節子	元隣組	旧居住地	

	香典 品物	名前	C-2との関係	他村住所	備考
63	三千円 御見舞千円	小林吉五郎	長男元同僚	市内	
64	千五百円	米▼勝海	近所		
65	二千円	■千広	夫の姉の嫁ぎ先親戚	松本市	
66	三千円 御見舞千円	青木正次	長男同僚	市内	
67	二千円	清沢好弘	長男元同僚	市内	
68	三千円 御見舞千円	▼▼英智	長男元同僚 66の姉の夫	松本市	長男の擬制子
69	三千円	▼▼栄市	38の長女の夫 C-2が仲人	東京	Cの擬制子
70	三千円	▼▼国男	69の親か親戚	東京	
71	五百円	○〇匡寛	元隣組	旧居住地	
72	三千円	小林昭平	隣組	市内	
73	二千円	山本保	不明		
74	三千円	▼▼局長代理会	長男同僚	木曽郡	
75	三千円	伊藤正典	不明		
76	二千円	小池正一	不明		
77	三千円	曾根原正雄	長男元同僚	市内	
78	二千円	大橋真雄	長男元同僚	不明	
79	二千円	和木雄治郎	不明		
80	千円	古池哲英	不明		
81	三千円	小林一夫	長男元同僚	市内	
82	千円	塚本和喜次	不明		
83	五千円 御供 御見舞千円	■克人	甥	松本市	
84	二千円	■早水	甥	松本市	
85	三千円	東川*記載なし	87の従弟 本家の三女の夫	川崎市	
86	一万円 御供 御見舞二千円	■兵一	生家の甥	松本市	
87	一万円 御供	▼▼今朝平	本家の孫次女の嫁ぎ先	東京	長女の擬制子
88	一万円 御供	■忠男	妹の夫	松本市	
89	二千円	伊▼資泰	旧居住地の親しい家 長男夫婦の仲人	旧居住地	代替わりして長男の代になっている 擬制親
90	三千円 御見舞二千円	▼▼増雄	長男夫婦の擬制子 元同僚でもある	市内	長男擬制子
91	八千円 御供 御見舞千円	□□栄徳		旧居住地	同姓
92	七千円 御供	△△嘉門	旧居住地 長男夫婦の羽親	松本市	代替わりして長男の代になっている 擬制親
93	三千円	■宏充	90の親戚		
94	二千円	■進	姪の夫	松本市	
95	五千円	■幸市	従兄弟の家の長男	東京	
96	二千円	吉田稔	不明	松本市	
97	一万円 盛花	■三郎	二男長女の夫		
98	三千円	上田修	不明	東京	
99	五千円 御供 御見舞千円	□□本明	擬制子	旧居住地	同姓 Cの擬制子
100	二千円	石▼堅	90の妻の兄	上田市	父親は公務員で、昔は旧居住地におり、C-2夫婦及びその長男夫婦と家族ぐるみで付き合い合っていた
101	二千円	平沢潭	隣組外の近所	市内	漆器屋
102	三千円	大▼仁	孫の恩師 同村の出身者	松本市	
103	五百円	■重男		旧居住地	同姓
104	二千円	竹原孝志	1の職人の生家	東京	
105	三千円	外垣博重	不明		
106	千円	宮木優一	不明		
107	三千円	有賀永	長男元同僚	市内	
108	三千円	田中国次	不明		
109	千円	久保田誠一	不明		
110	三千円	◎◎修一	隣組	市内	
111	二千円	◎◎寿作	隣組110の親	市内	
112	三千円	下條万平	長男元同僚		
113	三千円	鈴木守男	不明		
114	二千円	伊勢市太郎	不明		
115	五千円	▼▼綾登	長男友人 C-2夫婦が仲人	松本市	Cの擬制子
116	三千円	▼▼石近	115の妻の生家	松本市	

葬儀の拡大化と縮小化

	香典 品物	名前	C-2との関係	他村住所	備考
117	千円	田原勝夫	不明		
118	三千円	手塚明	不明		
119	三千円	■秀雄	夫の姉夫婦長女の夫	東京	
120	千円	浦野三郎	長男同僚		
121	二千円	竹沢保之	不明		
122	三千円	■理三郎	夫の姉夫婦の次女の夫	神奈川県	
123	五千円 花輪 御見舞千円	■督衛	夫の姉夫婦の長男	上田市	
124	千円	小栗正好	不明		
125	千円	田原三郎	不明		
126	千円	山川敦	不明		
127	二千円	降旗久男	長男元同僚	市内	
128	三千円	青木卓郎	長男元同僚	市内	
129	千円	石井一明	長男元同僚		
130	千円	波切清	長男元同僚		
131	千円	今井博文	不明		
132	千円	笠井民好	不明		
133	千円	田方満久	不明		
134	二千円	丸山利夫	不明		
135	二千円	上原實	不明		
136	千円	松原千春	長男同僚		
137	千円	小松詔三	不明		
138	千円	野口英作	不明		
139	千円	上松郵便局 切 手類売捌人組合	長男勤務先の付き合い	木曾郡	
140	千円	小松一由	不明		
141	千円	宮木伝	不明		
142	五千円	上松郵便局 親和会	長男の勤務先		
143	千円	杉山充	不明		
144	二千円	■勇	姪の嫁ぎ先	埴科郡	
145	一万円	■深志	甥 (妹の長男)	更級郡	
146	五千円	■昭博	甥 (妹の二男)	埴科郡	
147	三千円	井上清	不明		
148	五百円	△義近	旧隣組	旧居住地	
149	五百円	○宗次	旧ムラ内	旧居住地	
150	二千円	藤村カン一	不明		
151	一万円	■正一	妹の長男	諏訪市	
152	御供	▼技研工業所	次女夫の勤務先	松本市	
153	花輪	中村伝	県議	市内	
154	御供	高橋隆治	不明		
155	盛花	■俊喜	孫 二男の長男	東京	
156	二千円	■頼胤	姑の従兄弟の長男	松本市	
157	二千円	伊藤森江	不明		
158	二千円	清水儀平	不明		
159	三千円	■節郎	長女夫の甥	東京	
160	千円	○孝逸	旧ムラ内	旧居住地	
161	二千円 御見舞二千円	◎喬夫	隣組 特に親しく付き合い ている家	市内	
162	二千円	中島信一郎	長男勤務先の付き合い	木曾郡	
163	千円	原信郎	長男勤務先の付き合い	木曾郡	
164	三千円	大▼太三郎	長男元勤務先同僚の父 家 族ぐるみの付き合い	市内	
165	二千円	百瀬晴敏	旧ムラ内	旧居住地	
166	千円	川上幸男	不明		
167	千円	上條正子	長男元同僚	市内	
168	千円	○真寿夫	旧ムラ内	旧居住地	
169	千円	確▼久雄	長男妻の仕事 (和裁仕立)	市内	呉服屋
170	千円	波切雄一	長男元同僚	市内	
171	五千円	太田定	長女夫の従兄弟 疎開して いた	東京	
172	千円	上島豊三郎	不明		
173	二千円	鈴▼武雄	出入の呉服屋 長男妻の仕 事関係でもある	松本市	
174	千五百円	山田千代太郎	不明		
175	千円	宮木芳郎	不明		
176	千円	尾崎良夫	不明		
177	三千円	松▼喜司	長男妻の仕事関係	市内	呉服屋
178	二千円	上條清三	隣組 隣家	市内	

	香典 品物	名前	C-2との関係	他村住所	備考
179	千円	堀田国春	長男の仕事関係か	木曾郡	
180	千円	河▼一明	長男妻が親しくしている家	市内	
181	千円	古旗千秋	旧ムラ内か？		
182	千円	○○要一	隣組	市内	
183	二千円	○○敏晴	隣組	市内	
184	千円	○○博二	隣組	市内	組長
185	千円	○○○番町区			
186	五千円	横▼重	長男との付き合い	伊東市	旧居住地出身の研究者
187	二千円	村田孝	不明		
188	三千円	○○倍七	旧ムラ内	旧居住地	
189	三千円	■■■正治	長女夫の弟 家族ぐるみの付き合い	伊那	
190	千円	○○千明	旧ムラ内	旧居住地	
191	五百円	○○常市	旧ムラ内	旧居住地	
192	五百円	□□紀夫	旧ムラ内	旧居住地	同姓
193	二千円	大原喜内	不明		
194	二千円	鳥▼光正	長男友人	東京	
195	千円	■■■みどり	姪	東京	

の範囲が居住地の近隣村あるいは市域にとどまらず、長野市や東京およびその周辺に拡大していることである。Cの長女の夫の生家は松本市ではあるが居住地は東京であり、そこでの人間関係が葬儀の参列者の範囲にも拡大をもたらしている。また、孫が長野市の居住者と結婚したため、その関係で長野市内の親族が参列している。さらに、上記の数に入らない約一〇〇名はほとんどが長男の勤務先の関係者である。

この葬儀に関する献立やそれにかかった買い物内容等の記述は一切見られない。葬儀の次第は『音信帳』により、二月十日朝死亡、その夜は親族（長男夫婦とその子供夫婦と家族、長女夫婦、次女夫婦とその子供たち、二男家族とその子供たちなど）で湯灌が行われ、納棺されている。翌日、市の郊外にある火葬場で火葬にし、翌日十二日に駅前旅館で告別式が行われていることが確認できる。今回も、いわゆる骨葬である。葬儀委員長は隣組の中でもM家と日常的に行き来があった隣家の主が指名され、

香典を受け付ける帳場は隣組の中でも若手の二人があたっている。また、旅館で行ったとはいえ、通夜の食事および旅館での忌中払いの取り回し³⁾などの準備はあり、多少のお勝手仕事もあり、それに関わる買い物などもなされている。それらの支払いは十三日に帳場を担当した一人と、隣組の中でも年長者の二人の三人ですべて精算が行われ喪主に領収書をつけて報告されている。新居住地の家々の夫たちはほとんどがサラリーマンであり、二日あるいは三日にわたって仕事を休まねばならず、本人は勿論、葬家にとってもそれだけの労力をかけてもらわなければならないことは気の重いことであつたらう。

4、昭和五十年代の葬儀

C-2の葬儀があつてはほぼ三年半後、一年ほどの闘病生活の後にD-1（大正五年生）が逝去する。体調を崩し、早期定年退職を選択して五八歳で職を辞したと言うが、

その直後ぐらいから入退院を繰り返すことになった。長女は既に婚出していたため、妻が病人の看病などをし、長女が一週間に一度ぐらい付き添いを替ることで何とかやりくりをしていた。死亡は昭和五十一年九月二十四日のことである。病院で妻・長女とその家族に看取られ死亡した。死に水は病院で準備した水で口びるを濡らすことはした他、看護婦によって清拭が行われ、湯灌の必要がないようにきれいにされた遺体が病院からストレッチャーに乗せられて自宅に帰った。遺体は座敷の床の前に安置され、遺体にはM家で以前から使用されていた刃物が載せられた。既に連絡を受けた隣家を初めとする隣組の人々（このときは日中だった）、女性たちが多かったという）が集まって遺体を出迎え、すぐに枕飯や枕団子が遺体の枕元に供えられた。また、すでに危篤の連絡を受けたD-1の兄弟姉妹やその家族が夜までには集り、通夜が行われた。葬儀に関わる事務的な手続き（棺や祭壇の準備、神官の世話・火葬許可・神官と

の日程調整・式場となる旅館との打ち合わせなど）は、隣組やD夫婦の擬制子などが中心となつて、滞りなく行われた。

翌日、火葬場の時間にあわせて納棺が行われ、遺体には死者が生前好んで着た着物が掛けられ、白足袋は既製品が足の上におかれた。経帷子・頭陀袋などは塗った覚えがないというので、棺と一緒に届けられたのである。棺には、財布・定期券入れ・眼鏡・スケジュール手帳・万年筆など死者が生前常に持ち歩いていたようなものが入れられた。

C-2同様、二十五日は火葬場で火葬にし、二十六日告別式が行われた。C-2同様、告別式は駅前前のC-2の時とは別の旅館で行われた。前日火葬にふしているのので、骨葬である。神官は三人、C-2同様、この地に引越して以来、依頼をしている神官である。告別式終了後、遠方の親族が多いということ十日祭も併せて行った。ただし、C-2もD-1も納骨は五十日祭（仏教の四十九日にあたる）を終わった時

点で行っており、C-1の場合と異なる点である。

この葬儀の喪主はD-2であるが看病疲れなどを考慮し、次世代E-1（長女の夫）が務めることになった。E世代がM家の次世代であることは隣組も承知をしており、D-2は特に隣組にその件で断りを入れたりはしなかった。

この葬儀の出席者は表4の通りで、記載されている氏名数は二五六名である。親族およびその関係者五九名、擬制親子関係者七名、同姓及びその関係者一〇名、旧居住地の関係者三六名（+a）となっており、C及びB世代の親族関係に加えD夫婦の長女（E-2）の婚姻に伴う親族姻族関係の参列者が増えていることが分かる。そして、D-1にとっては祖父母の親族の名前もみることができ、世代交替が行われているにもかかわらず、婚姻に伴う親族関係は孫の代までは確実に活かしていることが読みとれる。

また、C-2同様、地縁関係者も旧居住

地と新居住地双方にまたがっており、加えてD—1の場合には若くして亡くなったためか旧居住地内に居住する小学校の同級生などがC—2には無かったものである。さらに、ほぼ現役に近い時点でのD—1の死は、退職した時点での職場関係とその前の職場関係の双方の参列者をみている。不明と書かれたものは、話者の知らない名前であり、ほぼ退職時点の職場関係者であろうと想像される。退職時の職場を含め木曾郡内（その前に佐久市内に二年ほどいた）の職場に移動して四年ほどの短い期間ということもあるが、家から遠い場所にある勤務地であり、M家の人々が木曾郡内の職場の職員たちに会うこともなかった。ひきかえ、木曾に移るまでの職場は勤務年数も長く、旧居住地にいる頃からお馴染みの職員さんもいたり、引越してからは勤務先に家族が用事で出かけたため、日常的に行き来する場所であったため、ほとんどの職員と顔見知りであった。そうしたことが旧職場の職員の参列も多くなった一因であろう。D

—2はこの時点で、大勢の人々が参列してくれないわゆる賑やかな葬儀を喜び、それは夫のこれまでの働きがそうさせたのだと考えていた。

D—2（大正八年生）はこの後三十年余を生きて、平成二十年十二月施設で老衰のため死亡する。D—1の参列者の多さは、D—2の葬儀をどうするかということをも世代に考えさせることになった。もちろん、D—1の葬儀が終わった時点でそのようなことを考えたわけではなく、D—2が施設に入所し二年ほどが経過して体力が衰え始めてからのことである。

D—1のような地域で一般的と考えられているような葬儀をすると、どうなるかを考えると、D—2の葬儀を機に付き合いを切らざるを得ない。E夫婦の勤務先や交際範囲を考えるとD—1と同じぐらいの数の参列者が予測される。しかし、M家はD—2の葬儀をもって、終焉を迎える。ということになると、参列してもらった返礼は全てE夫婦が負って行かねばならない。既に

六〇歳代半ばを迎えたE夫婦にとつて、それはしんどい。かといって、それを次世代のF夫婦やその子供に肩代わりはさせられない。ということは、付き合いを自分たちの出来る範囲に切るしかない、という結論に達し、表4のD—2欄に○をつけた人々に限り、D—2の死亡を知らせたという。そのほかの知らせるべき所には、「家族のみで行った。香典は堅く辞退する」という葉書を年賀状代わりに送った。これができたのは、D—2がD—1死亡後、長女の婚家に同居することになったため、隣組などと疎遠になっていたからこそであるという。D—2の葬儀は葬祭場で通夜も行い、告別式も行われた。亡くなったのが夕方というより夜に近かったため、施設から葬祭場の通夜室に移動。枕飯・枕団子・枕もとの花・ロウソク・線香（E世代の式場への到着が遅れたため、葬祭業者が仏式のしつらえをした。もつとも枕飯・枕団子などはM家では今までもおこなっていた。線香も立てていた。）などすべて葬祭業者が行い、

葬儀の拡大化と縮小化

表4 昭和五十一年 御香奠帳 D-1

	香典 品物	名前	D-1との関係	住所	備考	D-2参列者
1	三万円	■■■夫	弟	栃木県	親族	夫婦とも死亡
2	三万円	■■■庄司	姉夫	東京	親族	夫婦とも死亡
3	五万円	■■■明	妻生家	松本市	親族	弟は死亡 妻が出席 ○
4	三万円	■■■芳人	妹夫	松本市	親族	妻は死亡 本人出席
5	一万円	■■■俊喜	甥 1の長男	東京	親族	甥 海外在住 ×
6	一万円	■■■勝	甥 4の三男	松本市	親族	○
7	一万円	■■■清志	甥 4の二男	埼玉県	親族	8に依頼 ×
8	一万円	■■■和水	甥 4の長男	松本市	親族	○
9	一万円	■■■今朝平	2夫婦の擬制子	東京	妻は本家の次女	姉の擬制子
10	一万円	■■■定	2の従弟	東京	一時妻子が疎開していた	
11	五千元	■■■秀夫	4の兄 4の本家	松本市	親族関係	
12	三千元	■■■速郎	2夫婦の家の職人	東京	親族関係	
13	五千元	▼▼技研工業所	4の勤務先	松本市	親族関係	
14	二千元	■■■清次	9の従弟	川崎市	妻は本家の三女	9及び本家との関係
15	五千元	■■■新治	3の分家 妻の従弟	松本市	親族関係	○
16	五千元	■■■邦彦	姪 3の長女の嫁ぎ先18の親 Dとも仕事関係あり	生坂村	親族関係	
17	五千元	■■■武子	18の姉	生坂村	親族関係	
18	五千元	■■■和夫	姪の夫	松本市	親族	姪○
19	三千元	金見実	不明			
20	五千元	■■■芳郎	甥 3の長男	東京	親族	甥○
21	五千元	▽▽喬夫	隣組の中で親しい家	市内	隣組	
22	千円	高木栄	不明			
23	千円	▽▽重一	隣組	市内	隣組	
24	千円	▽▽町睦会		市内	町会の親睦団体	
25	二千元	大島義弘	不明			
26	五千元	■■■本広	2の兄	松本市	親族関係	
27	三千元	■■■元一	2の甥	松本市	親族関係	
28	一万円	■■■雅史	D長女の夫の弟	長野市	親族関係	長女夫の弟○
29	五千元	■■■武治	旧居住地の家に入った本家の長女：Dの同級生の長男		本分家関係	
30	五千元	□□保亀	旧居住地関係	松本市	同姓	
31	千円	△△真一	旧居住地関係 同組	松本市		
32	一万円	□□勝一	旧居住地関係 同組	松本市	同姓 本家	
33	千円 御見舞五百円	■■■博文	従兄弟の関係か	岡谷市		
34	千円	■■■彦十	従兄弟の関係か	岡谷市		
35	千円	伊藤芳広	不明			
36	千円	征矢野千枝子	不明			
37	五千元	▼▼綾登	友人	松本市		
38	一万円	△△嘉門	旧居住地 同組 擬制親	松本市	擬制親	擬制親 ○
39	三千元	福山茂喜	元同僚	市内		
40	千円	新家健一	元同僚か			
41	三千元	高砂文雄	元同僚			
42	五千元	■■■保太郎	姪の嫁ぎ先	東京	親族関係	
43	千円	横山正男	元同僚			
44	二千元	堀内征二	隣組	市内	隣組	
45	二千元	小松昭三	不明			
46	二千元	■■■上松分会	職場関係	木曾郡		
47	二千元	宮本伝	同僚	木曾郡		
48	二千元	小池正一	不明			
49	二千元	田方満久	同僚	木曾郡		
50	二千元	和木雄治郎	同僚	木曾郡		
51	二千元	久保田誠一	同僚	木曾郡		
52	二千元	野口英作	同僚	木曾郡		
53	二千元	大橋貞雄	同僚	木曾郡		
54	二千元	丸山利夫	同僚	木曾郡		
55	千円	松原千春	同僚	木曾郡		
56	二千元	尾崎良夫	同僚	木曾郡		
57	一万円	■■■忠男	叔母の夫(母妹)	松本市	親族	
58	三千元	■■■富士子	従妹 57の長女	東京	親族	
59	三千元	■■■広充	従弟 57の息子	東京	親族	

	香典 品物	名前	D-1との関係	住所	備考	D-2参列者
60	一万円	■昭博	従弟	埴科郡	親族	
61	二千元	○〇匡寛	旧居住地 同組			
62	三千元	△△琢雄	旧居住地	松本市		
63	五千元	■成行	伯母(父の姉)の親戚	松本市	親族関係	
64	一万円	□□本明	旧居住地 親の擬制子	松本市	同姓	
65	千円	○〇徹	旧居住地			
66	三千元	■英	従妹	埴科郡	親族	
67	五千元	■正治	2の弟	伊那	親族関係	
68	三千元	小島久治	元同僚	市内		
69	五千元	■郵便局内有志	同僚	木曾郡	5人の名前あり	
70	千円	上原幸夫	同僚	木曾郡		
71	二千元	上原実	不明			
72	二千元	山本保	不明			
73	千円	小松一由	不明			
74	一万円	■幸市	母の従弟	松本市	親族関係	
75	五千元	山口茂幸	不明			
76	千円	斉藤和明	不明			
77	二千元	上島豊三郎	不明			
78	二千元	波切清	元同僚	市内		
79	三千元	▽▽芳見	隣組	市内	隣組	
80	三千元	▽▽庭二	隣組	市内	隣組	
81	三千元	▽▽弘次	隣組	市内	隣組	
82	三千元	▽▽豊	隣組	市内	隣組	
83	三千元	大▼仁	長女恩師	松本市		
84	二千元	川上幸男	不明			
88	三千円 御見舞二千元	石井一明				
89	三千円 御見舞三千元	小林栄一	長女夫婦仲人	松本市	長女の擬制親	
90	五千元	小口豊美	妻従兄弟	松本市	親族関係	
91	一万円	高橋静渡	友人	市内		
92	三千元	奈良井新也	元同僚			
93	三千元	い▼た	妻の仕事先	市内	呉服屋	
94	一万五千元	横山重	文学上の恩師	伊東市		
95	千円	宮本好人	日常的付き合い	市内	写真屋	
96	千円	百瀬範雄	不明	松本市		
97	三千元	青木正次	元同僚	市内		
98	三千元	▽▽清三	隣組 隣家	市内	隣組	
99	千円	柳沢啓司	不明			
100	二千円	五▼会	不明			
101	千五百円	□□重男	旧居住地 同姓	松本市	同姓	
102	五千元	下▼正一	64から妻をめぐっている 関係での付き合い	市内		
103	千円	上条久芳	不明			
104	千円	原八郎	同僚	木曾郡		
105	千円	畑中守	同僚	木曾郡		
106	千円	折田薫	不明	川越市		
107	千円	小山哲夫	不明	明科町	隣組	
108	三千元	▽▽寿作	隣組 隣家	市内	隣組	
109	三千元	▽▽虎之助	隣組	市内	隣組	
110	三千元	▽▽敏晴	隣組	市内	隣組	
111	三千元	▽▽修一	隣組 108の長男	市内		
112	二千元	清水儀平	不明			
113	五千元	大▼初美	元同僚 家族ぐるみの付 き合い	岡谷市		
114	千円	手塚実宅	旧居住地	松本市		
115	千円	柳沢房芳	元同僚	松本市		
116	三千元	北沢袈裟二	元同僚	市内		
117	二千元	百瀬晴敏	元同僚	松本市		
118	六千元 米五キロ	御供 ◇◆正志	元同僚 擬制子 旧居住地	松本市	擬制子	
119	六千元 餅米 五キロ	◇◆英智	元同僚 擬制子 旧居住地	松本市	擬制子	
120	三千元	大▼太三郎	113の親 家族ぐるみの 付き合い	市内		
121	五千元	二村武	よく利用する美容院	市内	美容室	
122	五千元	■喜吉	2の甥 家族ぐるみの付 き合い	伊那	親族関係	

葬儀の拡大化と縮小化

	香典 品物	名前	D-1との関係	住所	備考	D-2参列者
123	六千円	◇◆増雄	元夫婦とも同僚	市内	擬制子	○
124	二万円	隣組一同	10名の名前あり		隣組	
125	千五百円	□□三也司	旧居住地	松本市	同姓	
126	せんご	□□資起	旧居住地	松本市	同姓	
127	千円	小松茂春	不明			
128	千円	小松正文	不明			
129	千円	小沢延	不明			
130	千円	小沢治亀	不明			
131	千円	安藤六雄	不明			
132	五百円	横▼博	旧居住地	松本市		
134	二千円	横▼倍七	旧居住地	松本市		
135	五千円	■忠雄	従妹	松本市	親族	
136	千円	倉澤博二	隣組	市内	隣組	
137	千円	小松善作	不明			
138	千円	米窪寿雄	近所	市内	家具屋	
139	一万円	■廣司	弟妻の生家	東京	親族関係	
140	一万円	■雄司	弟妻の弟	東京	親族関係	
141	一万円	■三郎	姪夫	東京	親族	
142	一万円	■深志	従妹	更級郡	親族	
143	三千円	■憲司	従弟の長男(母の生家)	松本市	親族	
144	一万円	■兵一	従弟(母の生家)	松本市	親族	
145	三千円	山内良三	不明			
146	三千円	小林昭平	同僚	木曾郡		
147	千円	○○重夫	旧居住地	松本市		
148	三千円	石川長司	同職の付き合い	別職場	松本市	
149	五千円	宮木繁子	不明			
150	三千円	■武	従弟	松本市	親族	
151	七千円	■克人	従弟	松本市	親族	
152	三千円	■栄市	母の従妹の長女夫	東京	親族関係	
153	三千円	■国男	152の親か	東京	親族関係	
154	千五百円	□□正哉	旧居住地	松本市	同姓	
155	一万円	■頼章	祖母の従兄弟の子	松本市	親族関係	
156	三千円	田中公恵	不明			
157	二千円	■繁勝	母の従兄弟あるいはその子	松本市	親族関係	
158	三千円	北▼智弘	長女の恩師	近所	市内	
159	三千円	古畑正	不明			
160	三千円	○○浅五郎	118の親	旧居住地	松本市	擬制子の親
161	一万円	○○郡吾	元々上司	旧居住地	松本市	擬制親
162	千円	○○篤美	旧居住地	松本市		
163	千円	○○隆三	旧居住地	松本市		
164	千円	○○真	元同僚	旧居住地	松本市	
165	千円	倉科武子	不明			
166	千円	春日道弘	旧居住地	松本市	同姓	
167	千五百円	□□正人	旧居住地	松本市		
168	千円	久保寺均	不明		親族関係	
169	二千円	小口茂雄	妻の従兄弟	松本市		
170	千円	○○千明	旧居住地	松本市		
171	三千円	○○治人	旧居住地	松本市	親族関係	
172	五千円	■要人	長女の婚家の分家	長野市		
173	千円	横山健児	旧居住地友人	市内		
174	千円	米久保貞治	旧居住地友人	市内		
175	千円	丸山祥平	旧居住地同級生	市内		
176	千円	花村奈津子	旧居住地同級生	市内		
177	千円	青柳鶴吉	旧居住地同級生	市内		
178	千円	丸山治吉	旧居住地同級生	市内		
179	千円	丸山潔	旧居住地同級生	市内		
180	二千円	道下政雄	同職の付き合い	別職場	須坂市	
181	二万円	■直太	長女婚家	長野市		
182	二千円	横山福美	旧居住地同級生	市内	同姓	
183	七千円	□□栄徳	旧居住地	同姓	松本市	
184	五千円	横山高久	元同僚	市内		
185	二千円	青木卓郎	元同僚	市内	親族	
186	五千円	■理三郎	従妹	神奈川県		
187	千円	百瀬常市	旧居住地	松本市		
188	三千円	有賀永	元同僚	市内		
189	二千円	降旗久男	元同僚	不明		

	香典 品物	名前	D-1との関係	住所	備考	D-2 参列者
190	千円	横山幸信	元同僚	市内		
191	二千円	井上清	同職の付き合い 別職場	木曾郡		
192	二千円	伊勢市太郎	同職の付き合い 別職場	木曾郡		
193	一万円	木曾南部会	職場関係	木曾郡		
194	千円	笠井民好	不明	諏訪市		
195	三千円	奈良井貞美	不明			
196	三千円	吉江義晴	不明			
197	千円	北沢佐久男	元同僚	市内	親族	
198	五千円	■■秀雄	従姉	東京	親族	
199	一万円	■■俊一郎	従兄	岡谷市	親族関係	
200	一万円	■■梅野	長女婚家 戸主の生家	長野市	親族関係	
201	一万円 玉串料二千円	■■孝男	長女夫の妹	長野市	親族関係	長女夫の妹○
202	一万円	■■勇	長女夫の叔母	長野市	親族関係	
203	一万円	■■功	長女夫の叔母	長野市	親族関係	
204	一万円	■■正一	長女夫の叔母	長野市		
205	三千円	田村義爾	元同僚	市内		
206	三千円	手塚明	不明			
207	三千円	小沢達雄	不明			
208	三千円	奈良井曾門	元同僚			
209	三千円	丸山恒男	不明			
210	千円	河田高	不明			
211	二千円	高砂政郎	元同僚	市内	親族関係	
212	五千円	■■藤一郎	2の姉の嫁ぎ先 2の甥	朝日村		
213	二千円	北沢清	不明			
214	二千円	小林吉五郎	元同僚	市内		
215	二千円	小林一夫	不明			
216	三千円	中野計子	不明			
217	千円	伊東正吾	不明			
218	千円	田中良一	不明			
219	千円	大和恒文	不明			
220	三千円	古旗浩入	不明			
221	三千円	青木茂夫	元同僚	市内		
222	二千円	曾根原正雄	元同僚	市内		
223	三千円	平沢潭	不明		親族	
224	一万円	■■督衛	従兄	上田市		
225	五千円	浜▼涉	長女恩師 友人	波田町		
226	三千円	神村二郎	不明			
227	三千円	川島邦夫	不明			
228	千円	江口裕治	不明			
229	二千円	▼▼郵便局長	元職場		名字と住所から 従兄と思われる	
230	一万円	伊藤(以下記述なし)	従兄か	東京		
231	三千円	清沢好弘	元同僚	市内		
232	二千円	熊谷英澄	不明		長女の擬制親	
233	三千円	■■正巳	長女仲人	松本市		
234	三千円	笠原社平	不明		親族関係	
235	五千円	■■節郎	2の甥	東京		
236	千円	青柳岩美	不明			
237	千円	小山耕作	不明		親族関係	
238	三千円	■■弥麻治	2の兄弟の関係	朝日村		
239	三千円	奥山俊作	不明			
240	三千円	河▼一明	妻の友人家族ぐるみの付き合い	市内		
241	三千円	金井幸雄	不明			
242	二千円	山本典人	不明			
243	二千円	大▼慶喜	旧居住地 同級生	松本市		
244	千円	百瀬太郎	不明	市内吉田		
245	千円	手塚貞子	不明 同級生か			
246	千円	竹田貞夫	不明			
247	二千円	原信郎	同僚	木曾郡		
248	二千円	飯吉富夫	長女の婚家の関係	長野市		
249	二千円	山田…記述なし	不明	町内		
250	三千円	▼▼周平	長女夫職場の上司	上田市	親族関係	
251	五千円 御見舞二千円	■■頼之	祖母の従兄弟の子	松本市		
252	三千円	鈴木武雄	出入の呉服屋	松本市		
253	千円	塚本和喜次	同僚か	木曾郡		
254	五千円	島崎光正	友人	東京		
255	二千円	和田英一	不明			
256	三千円	丸山祐一郎	友人	東京		

翌日の夜通夜、その翌日納棺・出棺・火葬・告別式・十日祭が行われた。D—1までに無かったものとしては、納棺師による死に化粧と死に装束が着せられたことである。

D—2の参列者は○のついている人々であるが、連絡はD夫婦の兄弟姉妹、甥・姪及び擬制親・子に行った。しかし、D—1の姉夫婦、妹、弟夫婦は既に死亡しており、弟夫婦の甥は海外在住のため、姪は事情があり参列できなかった。D—2の関係も弟は既に死亡、弟の妻と甥二人、姪一人が参列。そのほかには長女の夫の妹と弟、孫の妻F—2の両親、擬制子一人と代替わりはしているが擬制親一人であり、そのほかには家族五人という小さな葬儀になっている。

5、まとめにかえて

以上、欠損はあるものの四世代にわたる葬儀に関わる『音信帳』をみて来た。分家であるM家の葬儀は、明治期（一八〇〇年

代）、親族や同姓・地縁集団を基本としたものであった。大正期の記録がないのが残念であるが、およそ半世紀以上を経た昭和十年代（一九三〇年代終わり）の葬儀になると、血縁や地縁に加え「職場」や「趣味」での付き合い関係の参列者がみられるようになってくる。死者とは一度も顔を合わす機会がなかった人でも、葬儀に参列するようになるのである。この傾向は第二次世界大戦後の一九五〇年代になると更に強まり、一九七〇年代に入るとその傾向はもっと強くなっていくように思われる。C—2の葬儀の参列者の内訳をみると、血縁や地縁を合計した数のおよそ倍の数がどうやら職縁と捉えてよさそうである。こうした状況を見ると、現職が退職してかなりの年数が立っているか、世帯を譲っているか否か、といったことも関係しようが、人は何のために面識もない死者のために葬儀に参列するのであるのか。もっといえば、葬儀とは一体だれのためのものであろうかと考えさせられる。

死者を死者の行くべき場所に送るため、そして生者は死者と別れて生きていくための決別の機会であった。その後七日七日の供養を行い、四十九日経った日に餅などを親族が引つ張り合って食べることにより、死者との最後の食い別れをして死者は死者の世界に落ち着ける、と考えられていた。それは死者とごく親しい身内の人々が悲しみから立ち直る期間でもあったのだが、B—1の葬儀あたりから親族や地域社会の人だけではなく、全くそれまで関係のなかったような人が入り込み、死者を送っていることが分かる。一九五〇年代になるとその傾向は更に増していき、死者は昨日まで会ったこともない人に見送られることになる。参列者の内訳をみれば、葬儀への参列が「死者を送る」ということよりも、生きている死者の親族との関係を重視していると思われ、それは日常の付き合いの延長線上にある「付き合い」の一端とみることができ

きる。もちろん、参列者の多くは告別式以降、

七日七日の供養に訪れるようなことはない。また、職場や通婚圏が拡大したために、七日七日の供養に再度訪れるということも不可能である場合も多い。そうした物理的状況は、一九七〇年代ごろから告別式の後、引き続き初七日の供養も行われるようになったことをみても明らかである。近年ではそれが当たり前のようになり、四十九日もその日のうちに行う場合もみられるという。こうした状況を見ると、死者を懇ろに申うという意識より、生者と生者の付き合いや都合を優先して儀礼が執り行われるように変化していることも分かる。

一方では、究極の家族葬ともいえるようなD―2の事例に近い葬儀も近年増加している。家族・親族のみあるいはそこにごく親しい友人などだけを加えて葬儀を行い、時を経て亡くなったことを伝えるという事例も増加傾向にあるようである。もちろん、一九七〇年代のようないわゆる盛大な葬儀も一方で行われてはいるが、今後D―2のような葬儀も増加するものと思われ、家族

規模の調査と併せて今後も変化の様子を捉えていきたい。本稿は「音信帳」という限られた情報の分析であり、聞き取り調査が十分でない部分もあるが、少なくとも上記のような変化は見てとることができたと思われる。今後は、今回の資料を軸に葬儀全体の変化を捉え、その変化の芯にある人々の死や供養に対する意識の変化をたどってみたい。葬儀は所詮生きていく（残された）者が行う儀礼であり、その行い方をみることによって、理想的な死に方や生き方を考える資料に繋がるものと考えているからである。

本稿は国立歴史民俗博物館 共同研究「高度経済成とその前後における葬送墓制の習俗に関する調査研究」の調査の折に得た資料の一部を使用させていただいた。ここに記して関係者に感謝申し上げます。また、明治期の音信帳は読めない部分が多く、泉雅博氏のご助力を得た。記してお礼申し上げます。なお、親族関係図・集落概念

図・参考文献一覧等は紙幅の関係上割愛した。

註

(1) 調査地についての報告は、拙稿「ムラ組に於る庚申講の役割」『長野県民俗の会会報』8 一九八五年一〇月 長野県民俗の会があるのを参照されたい。

(2) 同姓の祭り、先祖さまの祭り、祝い殿さまなど、祭りの呼び名はいろいろである。他姓の人々は「S姓の同姓のお祭りの日だから、皆 集まってるわ」などの言い方をする。祭神はM姓が八尋神、S姓が稲荷を祀っているという。集まる家々は姓を同じくする家で、それぞれが本分家関係で結ばれている。祭りは三月二〇日前後で、昼ごろ祠や神域に集まり、神官に祝詞をあげてもらった後、当番の家に行つて直会の飲食をする。当番は回りもちで、三盛り煮物で酒を飲む程度である。祭りにかかる費用は、その場で来年度分が集められる。

(3) 冠婚葬祭を旅館・ホテル・葬祭場などで行うようになり、そこで料理も出されるが、移行期はそれだけでは十分ではないと考え、手

作りの料理を多少なりとも作ってもてなす、という風習があった。長野県内では特に火葬場に行つて遺骨になるまでの間飲食するのが一般的で、その折には現在でも漬物や煮物が持参される。こうして、施設で出される料理以外の料理は大皿や井などに入れて饗され、客が自分のお膳にある器に取つて次客へと回すので、取り回しと呼んでいる。